

## 研究拠点形成事業 平成29年度 実施計画書

### B. アジア・アフリカ学術基盤形成型

#### 1. 拠点機関

日本側拠点機関：	愛知県公立大学法人 愛知県立芸術大学
(ウズベキスタン)拠点機関：	ウズベキスタン芸術大学
(中国)拠点機関：	大連民族大学
(韓国)拠点機関：	檀国大学校

#### 2. 研究交流課題名

(和文)：現代に生きる“手漉き紙と芸術表現”の研究 ～サマルカンド紙の復興を中心に～

(交流分野：芸術表現)

(英文)：The research for the culture of contemporary Hand-Made Paper and artistic expression. ~With the focus on the revival of Samarkand paper~

(交流分野：Artistic expression)

研究交流課題に係るホームページ：<http://labo.a-mz.com/paper/>

#### 3. 採用期間

平成29年4月1日 ～ 平成32年3月31日

(1年度目)

#### 4. 実施体制

##### 日本側実施組織

拠点機関：愛知県立芸術大学

実施組織代表者(所属部局・職・氏名)：学長・松村公嗣

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：美術・教授・柴崎幸次

協力機関：豊田市和紙のふるさと

事務組織：愛知県立芸術大学 芸術創造センター、芸術情報・広報課

##### 相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：ウズベキスタン

拠点機関：(英文) National Institute of Fine Art and Design named after Kamoliddin Bekhzod

(和文) ウズベキスタン芸術大学

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Head of International Relations Department, Senior teacher, Fazilat KODIROVA

(2) 国名：中国

拠点機関：(英文) Dalian Nationalities University

(和文) 大連民族大学

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Faculty of Design, Professor, MA Chun Dong

(3) 国名：韓国

拠点機関：(英文) Dankook University

(和文) 檀国大学校

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Dept.of Korean Traditional Costume, Assistant Professor, Yoonmee PARK

## 5. 全期間を通じた研究交流目標

本研究は、ウズベキスタンと日本、中国、韓国の芸術大学において、“手漉き紙”文化と“芸術表現”をテーマに調査・復興・再生を目指し、美術やプロダクト、文化財保存修復に応用できる紙と技法を開発する活動を、芸術大学の連携により成し遂げるための芸術・文化拠点の形成を目指している。

“紙”は、人類の根源的な文化形成における重要なメディアとして発展と交流、多様化を繰り返してきた。しかし、古来から伝わる“手漉き紙”文化は世界的に衰退傾向にあり、それらは大量生産時代の経済性や生活そのものの近代化など需要の変化によるものである。例えばウズベキスタンのサマルカンド紙は、硬筆によるカリグラフィー（書）やミニアチュール（細密画）の支持体として世界で最も美しいと言われた紙であるが約200年前に途絶えている。また、日本の和紙もユネスコの世界文化遺産として国際的な評価を得ているにもかかわらず、現在も衰退傾向が続き、後継者不足、従事者数の減少などに多くの問題を抱えている。

一方、紙の歴史や伝播をみると、タラスの戦い（751年）以降、この拠点形成を目指すアジアの国々は、過去1300年以上さかのぼっても“紙の道”として強いつながりを持つ関係にある。近代以前の紙の製法は人力と自然力によるもので、地域性、歴史性を象徴する多くの文化の跡が潜んでおり様々な情報を読み解くことができる。また紙に書（描）かれた文字や図、絵画などの表現は、日本、中国の古典絵画や、ウズベキスタンのミニアチュールなど、文化、経済、宗教など様々な目的の情報伝達を果たしてきた。

この“手漉き紙と芸術表現”の課題を芸術大学の連携により研究することは、国際的な芸術の分野において地域性と時間軸を縦横に結ぶ文化を融和させる取り組みであり、単なる伝統的な紙や技法の復元ではなく、新たな技術や概念を形成し現代ニーズに向き合うメディアとプロダクトを生み出しうる研究交流の形を目指すことができる。また本計画はウズベキスタンのサマルカンド紙の復興を軸に、紙の道（アジアを結ぶペーパーロード）として、日本側のリーダーシップと中国、韓国との協働により、保存修復の文化事業や新素材の開発、新しい芸術活動への応用など“手漉き紙と芸術表現”の意味を現代において再定義し、各国の独自性と多様性の表出による地域文化の醸成を目指すことを目標としている。

## 6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

平成 29 年度から開始

## 7. 平成 29 年度研究交流目標

### <研究協力体制の構築>

本事業の研究協力体制は、拠点機関として、ウズベキスタン芸術大学(ウズベキスタン)、大連民族大学(中国)、檀国大学校(韓国)の芸術系大学の連携によって構築する。

ウズベキスタン芸術大学は、本事業のメインテーマであるサマルカンド紙の復興において最も重要な研究拠点である。同校は、ウズベキスタンにおいて唯一美術の学位を授与できる高等教育機関であり、著名な画家、アーティストなど多数が教鞭をとり、ミニアチュールなどサマルカンド紙に関連した研究者が最も多い。これまで同校とは事前協議を繰り返し、3年間の長期に渡る本事業の研究実施に向けて最適な研究者による布陣を構築した。平成29年7月に日本においてキックオフミーティングを開催するため、まずは学長、コーディネーター、専門の研究者を日本に招聘し、本事業遂行の上での意思統一とサマルカンド紙の復興に関する実務レベルでの協議を行う。現状では難しいサマルカンド紙の現物調査(携帯顕微鏡での調査)の実施体制の構築を打合せし、調査に関する方法やスケジュールなど意思統一を行う。また、本学の和紙研究や保存修復事業との技術面での交流として、名古屋城本丸御殿の視察や製紙の用具類に関する公開授業を同時に開催する予定である。また、今後の3月に行うウズベキスタンでのセミナーは、同校主催で開催し、各拠点の1年間の調査研究の成果を持ち寄り、研究交流を深める場として予定している。

中華人民共和国(以下中国)の大連民族大学とは、これまでにグラフィックおよびプロダクトデザイン領域において交流が深く、展覧会の双方の大学での交互開催や、日本-中国のデザイン教育シンポジウムも共同開催した実績もあり、本事業に関しても研究協力者と交流し事前ミーティングを積み重ねてきている。まずは6月に日本側コーディネーターが大連に出向き、本事業の協議と合わせ、中国での研究協力体制の確認と2年目のセミナー開催についての正式に依頼を行う。また、中国における紙漉き文化継承に注目し、他の中国国内の関連地域へも調査研究の拡張を模索し、2年目の共同研究とセミナー開催を目標に交流を深めていく予定である。

大韓民国(以下韓国)・檀国大学校とは、本事業ではセミナーの開催は行わないが、5月に日本側コーディネーターが檀国大学校に出向き、本事業の協議と合わせ、韓国での研究協力体制の確認と、朴允美准教授を中心に韓国紙の歴史、伝統技法やプロダクトなど調査研究を予定している。

それぞれの拠点での成果は、平成30年3月ウズベキスタンで行う、S-1「現代に生きる“手漉き紙と芸術表現”の研究 ~サマルカンド紙の復興を中心に~」で、それぞれの拠点による成果の発表を行う。

### <学術的観点>

ウズベキスタンは紙が中国から最初に伝播した地域であり、中国、韓国は紙の起源、日本

は正倉院文書など1300年の歴史を持つ和紙文化が現在も多様性を継承しているなど、紙の道として、歴史や伝播、発展においてこの連携国は極めて重要な関係にある。本研究交流課題に掲げる“手漉き紙と芸術表現”は、情報伝達を司る文化融合の要として、いわゆる“メディアとしての紙”の役割が芸術表現行動とともに発展してきた点で、感覚的と思われがちな芸術行動を科学的な視座に導く、理論研究への礎を築くものとして計画している。そこでは、古典絵画や保存修復学の研究にとどまらず、現代に生きるアイデンティティを再定義する活動として芸術表現学全般やデザイン学に通じる成果が期待できる。

また、“手漉き紙と芸術表現”という研究態度は、その時代の紙の歴史的裏付けを、紙と技法との関連性から検証する視点である。例えばサマルカンド紙を使用したコーランやミニチュールなどの表現に関しても、現状では当時の技法は断絶し不明な点も多い。2008年にJICAの行った復興では、原料は桑で製紙し、米粉を塗布し磨いて制作するが、衰退前のサマルカンド紙は、おそらく麻（リネン）のボロ布から作られた紙も混在し、多様性の表出や文化財保存修復の観点からは、まだまだ多くの研究余地がある。

これらの観点から、平成29年度は、まずはメインテーマであるサマルカンド紙の調査に注力し、ウズベキスタン芸術大学とコーランやミニチュールの現地調査を共同で行うことにより、8世紀頃にサマルカンドの工房から派生していった、イスラム世界の紙についての知見を深める。また、紙のみならず書写・描画技法の探求も行い、芸術表現研究として総合的な視点からの解明を目指す。これにより事業全体の目標であるサマルカンド紙の復興の達成に向けて、芸術大学連携ならではの成果を得ることができると考えている。

#### <若手研究者育成>

芸術大学の拠点連携において、“手漉き紙と芸術表現”に注目した事業の利点は、全ての分野に紙と芸術表現への接点が見出せることである。絵画表現、版画表現、造形、デザインさらに理論研究も、支持体としての紙がなければ実現できないものであり、この制作・表現を極める研究態度は、芸術を志す者の国際的な共通認識であると考えている。

本事業での若手研究者の育成は“紙からつくる芸術表現行動”として、意欲のある研究者が自ら紙への価値観を見出しながら参画できる①【展覧会】、②【プロジェクト研究の推進】、③【大学院博士（前期・後期）課程などの授業、研修、留学の活性化】などを念頭に、できる限り若手研究者や博士課程学生が海外での研究・発表機会に恵まれるような育成プログラムを目標としている。平成29年度は下記の内容を予定している。

##### ① 【展覧会】国際交流展覧会への相互参加の推進

3月に開催するS-1セミナー「現代に生きる“手漉き紙と芸術表現”の研究 ～サマルカンド紙の復興を中心に～」では、国際交流展を同時開催する予定である。これまで日本で実施してきた「和紙素材の研究展」を国際展として発展させ、手漉き紙を使用した作品や復活させた手漉き紙そのものの展示、また共同研究におけるサマルカンド紙などの試作紙の成果発表、ポスター展示等を盛り込み、若手研究者を中心とした国際交流展の機会を設ける。

##### ② 【プロジェクト研究の推進】“手漉き紙”文化継承をテーマに、複数の共同プロジェクトを計画

(i) [R-1：サマルカンド紙の調査研究]に関する研究プロジェクトは本事業において重要な共同研究にあたり、サマルカンド紙や技法の調査、紙の復元などを行う。ウズベキスタン芸術大学にはミニアチュール作品などの研究者が多いことから、本調査研究を通じて各国の若手研究者が経験を積める場を提供できると考えている。

(ii) [紙からつくる芸術表現行動]は、自ら制作した紙での芸術表現を実施する活動を意味し、これまで和紙素材の研究として10年間活動した実績がある。平成29年度もこの研究を発展させる為に、現役学生と卒業後も研究のキャリアを積みたい若手作家達を広く受け入れるプロジェクトとして、愛知県立芸大和紙工房で実施する。

(iii) [文化財保存修復研究所におけるプロジェクト]としてサマルカンド紙やミニアチュールの復元・模写など、技術を要する研究事項があれば、本研究においても同研究所のプロジェクトとして研究実施を行うことを視野に入れている。同研究所は、これまで国内外の保存修復に関する研究物件を、現役学生や卒業後の研究・研修生が業務に従事することを通じて技術力の向上など目指し運営している。

### ③ 【大学院博士（前期・後期）課程などの授業、研修、留学の活性化】（本事業経費外）

中国・大連民族大学とはこれまでも留学、研修の実績が豊富で、特にデザイン研究分野では交流がすすんでおり、これまで中国人留学生のうち、大学教員7名、専門学校校長1名、グラフィックデザイナー6名の人材育成に至った成果があがっている。

平成29年度は、中国から大学院博士前期課程に6名の留学生を新たに迎えている。博士後期課程への進学を視野に研究を行う研修生も、[紙からつくる芸術表現行動]を研究テーマに取り入れている。また、大学院特別研究（和紙素材の研究）の授業においては、和紙を学ぶため、日本の他大学の学生や、欧米・アジア圏留学生も受講予定である。

今後も留学生や研修生の受入など促進できるよう和紙工房の整備にも努めていく。さらに連携国の芸術大学に古来の紙を復元する為の製紙工房の導入支援も検討している。

### <その他（社会貢献や独自の目的等）>

“紙からつくる芸術表現行動”の取り組みに関して、研究代表者が中心に行う和紙素材の研究という授業の形で、和紙工房の視察、古典技法の調査・復元などを実施する。また発表の機会として、紙から制作した作品による展覧会活動「和紙素材の研究展」を開催する。同展はこれまで大学院特別研究の授業の一環として行っており平成30年3月に名古屋において開催する計画をたてている。さらに講演活動なども国内外で積極的に実施する。

## 8. 平成29年度研究交流計画状況

### 8-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成29年度	研究終了年度	平成32年度
研究課題名	(和文) サマルカンド紙に関する調査				
	(英文) The research for the Samarkand paper				

日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 柴崎幸次・愛知県立芸術大学・教授 (英文) Koji SHIBAZAKI, Aichi University of the Arts, Professor
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) (ウズベキスタン) Fazilat KODIROVA, National Institute of Fine Art and Design named after Kamoliddin Bekhzod, Senior teacher
29年度の 研究交流活動 計画	<p>平成29年4～5月：[基礎調査] 日本国内においてウズベキスタン、及び中央アジアの手漉き紙文化の情報収集。東京国立博物館（保存修復課）、龍谷大学（理工学部）、東京大学（東洋文化研究所）、国立民族学博物館（情報管理施設）、JICAなど先行研究関係者（水俣市金刺潤平氏）へのヒアリングを行う。主に、柴崎、本田、鈴木が中心となり実施する。</p> <p>7月～10月：[試作] 愛知芸大和紙工房の整備及び、サマルカンド紙試作実験Ⅰ。和紙素材の研究など大学院授業との連動。</p> <p>11月：【共同研究】サマルカンド紙に関する調査（コーラン・ミニアチュール調査）ウズベキスタン（タシケント、サマルカンド）。ウズベキスタン芸術大学との合同調査で、サマルカンド紙が使用されたと考えられる古典絵画の紙、技法の調査を行う。可能であれば成分分析用サンプル紙を入手する。日本側は柴崎、高梨、本田、鈴木、佐藤を6日間タシケント、サマルカンドに派遣を予定している。</p> <p>12月：[調査分析] 日本にて、サマルカンド紙の調査結果を受け、分析を進める。（高知県紙産業技術センター、日本澱粉協会などの協力を得る）</p> <p>12月～2月：[試作] 愛知芸大和紙工房にて、サマルカンド紙試作実験Ⅱを行う。</p> <p>3月：【セミナー・展示開催】ウズベキスタンセミナー（ウズベキスタン芸術大学）の実施→国際交流展の実施、講演・報告の実施（日本の和紙文化、サマルカンド紙調査報告、中国紙、韓国紙の報告）、日本から5日間タシケントへ5名派遣予定</p>
29年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	平成29年度は、主に日本とウズベキスタンとの共同研究により、古いコーランやミニアチュールについての調査を実施することで、本研究の重要なテーマである、サマルカンド紙がどのような紙であったのかを共同研究により解明することができる。また、中央アジアの紙という情報の少ない分野において、これまでの先行研究に関して、国内で十分な調査をおこなうことにより、ウズベキスタンでの研究を進める目的を明確にする。

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 32 年度
研究課題名	(和文) 中国紙に関する調査 (英文) The research for the Chinese paper				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 柴崎幸次・愛知県立芸術大学・教授 (英文) Koji SHIBAZAKI, Aichi University of the Arts, Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) (中国) MA Chun Dong, Dalian Nationalities University, professor				
29年度の 研究交流活動 計画	平成29年4～5月：[基礎調査] 日本国内において中国の手漉き紙文化の 情報収集。東京国立博物館（保存修復課）、東京大学（東洋文化研究所）、 国立民族学博物館（情報管理施設）へのヒアリングを行う。主に、柴崎、本 田、鈴木が中心となり実施する。 6月：【共同研究】大連民族大学（大連）を訪問し、中国の古典絵画調査を 軸に紙文化研究の視点から調査実施計画の具体化を行う。また、同時に紙文 化関連施設の視察・調査を行う。日本側は柴崎、佐藤を大連に3日間派遣し、 中国側は周、金が実施する。 3月：【セミナー・展示開催】ウズベキスタンセミナー（ウズベキスタン芸 術大学）の実施→国際交流展の実施、講演・報告の実施（日本の和紙文化、 サマルカンド紙調査報告、中国紙、韓国紙の報告）				
29年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	大連民族大学との共同調査により、紙の起源からいち早く発展を遂げたと言 われる中国の紙に関する研究を、これまでの和紙研究の成果を生かし日本側 が主導する形で実施する。また現在の中国紙の実態とも照らし合わせ、紙の 系譜を俯瞰的にまとめる形で進めていく。これらの研究は2年目の中国セミ ナーにおいて主要なテーマとして位置づけている。				

整理番号	R-3	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 32 年度
研究課題名	(和文) 韓国紙に関する調査 (英文) The research for the Korean paper				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 柴崎幸次・愛知県立芸術大学・教授 (英文) Koji SHIBAZAKI, Aichi University of the Arts, Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) (韓国) Yoonmee PARK, Dankook University, Assistant Professor				
29年度の 研究交流活動 計画	平成29年4～5月：[基礎調査] 日本国内においてウズベキスタン、中国から朝鮮半島の手漉き紙文化の情報収集。東京国立博物館（保存修復課）、へのヒアリングを行う。主に、柴崎、本田、鈴木が中心となり実施する。 5月：【共同研究】韓国の古典絵画調査を軸に紙文化の視点から、調査実施に関するミーティング。同時に紙文化関連施設の視察・調査を行う。日本側は柴崎、兪を3日間ソウル市へ派遣し、韓国側は朴が実施する。 3月：【セミナー・展示開催】ウズベキスタンセミナー（ウズベキスタン芸術大学）の実施→国際交流展の実施、講演・報告の実施（日本の和紙文化、サマルカンド紙調査報告、中国紙、韓国紙の報告）				
29年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	紙の起源からいち早く発展を遂げたと言われる中国及び朝鮮半島の紙に関する研究は、これまでの和紙研究の成果を生かし日本側が主導する形で、韓国両国の現在の紙の実態と照らし合わせ、サマルカンド紙、中国紙と同様に紙の系譜を俯瞰的にまとめる形で進めていく。これらの研究は2年目の中国セミナーにおいて主要なテーマとして位置づけている。				



8-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「現代に生きる“手漉き紙と芸術表現”の研究 ~サマルカンド紙の復興を中心に~」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “The research for the culture of contemporary Hand-Made Paper and artistic expression. ~With the focus on the revival of Samarkand paper~”
開催期間	平成 30 年 3 月 7 日 ~ 平成 30 年 3 月 8 日 (2 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) ウズベキスタン、タシケント、ウズベキスタン芸術大学 (英文) Uzbekistan, Tashkent, National Institute of Fine Art and Design named after Kamoliddin Bekhzod
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 柴崎幸次・愛知県立芸術大学・教授 (英文) Koji SHIBAZAKI, Aichi University of the Arts, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Uzbekistan, Fazilat KODIROVA, National Institute of Fine Art and Design named after Kamoliddin Bekhzod, Senior teacher

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (ウズベキスタン)	
日本 〈人／人日〉	A.	5/ 30	
	B.	2	
ウズベキスタン 〈人／人日〉	A.	9/ 18	
	B.	2	
中国 〈人／人日〉	A.	2/ 10	
	B.		
韓国 〈人／人日〉	A.	1/ 5	
	B.		
合計 〈人／人日〉	A.	17/ 63	
	B.	4	

A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）

B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>本事業の研究課題「現代に生きる“手漉き紙と芸術表現”の研究 ～サマルカンド紙の復興を中心に～」に関する、第1回目のセミナーであり、“手漉き紙と芸術表現”に関する発表と、共同研究により調査したサマルカンド紙の解明と紙に関する関連の調査報告を行う。</p> <p>サマルカンド紙の解明の関しては、特に古いコーランやミニチュールの紙の調査報告、各国の紙の同時代比較など実施した結果を報告する。さらに参加研究者のパネル展示（ポスターセッション）、ワークショップ、展示（手漉き紙と芸術表現に関するもの）を実施する。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>セミナーはウズベキスタン芸術大学で行うが、本研究のテーマである“紙からつくる芸術表現”に関する目的の理解と周知につながると期待している。</p> <p>また、関係国の拠点機関での情報交換を活発化するなど協力体制を強固にし、3年間の研究交流活動から関連した研究の推進や教育環境の整備を誘発できる成果があがることを期待している。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>ウズベキスタン芸術大学と愛知県立芸術大学美術学部が共同で行う。また事務支援は、ウズベキスタン芸術大学事務局及び愛知県立芸術大学学務部芸術情報課が行い、名古屋大学ウズベキスタン事務所の協力を得る予定である。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>国内旅費</li> <li>外国旅費</li> <li>謝金</li> <li>備品・消耗品購入費</li> <li>デザイン・印刷費</li> <li>外国旅費・謝金等に係わる消費税（別経費にて充当）</li> </ul>
	<p>（ウズベキスタン）側</p>	<p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>セミナー会場提供</li> <li>ウズベキスタン国内研究者旅費</li> </ul>

### 8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

共同研究、セミナー以外の交流（日本国内の交流を含む）計画を記入してください。

所属・職名 派遣者名	派遣時期	訪問先・内容
愛知県立芸術大学 ・教授 柴崎幸次 ・准教授 佐藤直樹	6/19～6/22 予定	中国（大連民族大学）の訪問、視察、プロジェクトミーティング（研究者交流）
愛知県立芸術大学 ・教授 柴崎幸次 ・教育研究指導員 兪 期天	5/29～6/1 予定	韓国（檀国大学）の訪問、視察、プロジェクトミーティング（研究者交流）
National Institute of Fine Art and Design named after Kamoliddin Bekhzod ・Senior teacher Fazilat KODIROVA ・Lecturer Ziyakhanov Khurshid DJAVIDOVICH	6/23～6/28 予定	キックオフミーティングを開催し実施計画の確認を行う。NIFAD 大学代表者を愛知県立芸術大学に招聘し、ここから実質的な研究をスタートさせる。また、愛知県立芸術大学の和紙研究や保存修復事業との技術面での交流、製紙の用具類に関する公開授業を開催する。 さらに、名古屋城本丸御殿の視察、徳川美術館などの協力を得て、日本の料紙の調査を共同で行う。

### 8-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

該当なし

## 9. 平成29年度研究交流計画総人数・人日数

### 9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣元	日本 〈人/人日〉	ウズベキスタン 〈人/人日〉	中国 〈人/人日〉	韓国 〈人/人日〉	合計 〈人/人日〉
日本 〈人/人日〉		11/ 61 ( )	2/ 6 ( )	2/ 6 ( )	15/ 73 ( 0/ 0 )
ウズベキスタン 〈人/人日〉	2/ 6 ( 2/ 6 )	( )		( )	2/ 6 ( 2/ 6 )
中国 〈人/人日〉	( )	2/ 10 ( )		( )	2/ 10 ( 0/ 0 )
韓国 〈人/人日〉	( )	1/ 5	( )		1/ 5 ( 0/ 0 )
合計 〈人/人日〉	2/ 6 ( 2/ 6 )	14/ 76 ( 0/ 0 )	2/ 6 ( 0/ 0 )	2/ 6 ( 0/ 0 )	20/ 94 ( 2/ 6 )

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

### 9-2 国内での交流計画

10 / 20 〈人/人日〉
----------------

## 10. 平成29年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	480,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	4,300,000	
	謝金	550,000	
	備品・消耗品購入費	726,000	
	その他の経費	320,000	
	不課税取引・非課税取引に係る消費税	0	別経費にて充当
	計	6,376,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		637,600	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合計		7,013,600	